

詩篇の配列編集に込められた意義

詩篇・都上りの歌

詩篇は、全5巻、150篇からなる聖書最大の書物である。旧約の時代から現代に至るまで、数千年にわたり、信仰者に愛され親しまれてきた。みなそれぞれに「自分の好きな詩篇」があり、ともに泣き、ともに喜び、励まされ、教えられる、たましいの友である。

改めて1篇から順番に読んでみる。前後の詩篇との関連が明らかな場合もあるが、ほとんどの場合、漠然と組まれているようであり、関連性が薄く、断片化しているように見える。著者や執筆年代別に探ってみても、文学類型、使用目的によって分けてみても、どのように5つの巻にまとめられ配列されたかを知ることが容易ではない。

では、詩篇の配列には深い意味はなく、すぐれた詩篇の寄せ集めにすぎないのだろうか。あるいは、よく編集された一つの書物としてのなんらかの意義があるのだろうか。さらには、その編集者の意図を我々が理解することはできるのだろうか。

第五巻には、「上る歌」と表題が付けられた15篇からなる詩集（120篇から134篇まで）がある。讚美歌301番「山べに向かいてわれ」（121篇）、聖日礼拝のはじまりの招詞「さあ、主の家に行こう」（122篇）、結婚式の賛美（127篇、128篇）など、馴染み深い詩篇が収録されている。

都上りの歌は、表題が同じであることに加えて、ことばや言い回しの繰り返しが多く、長さが短めのため、ほかの箇所よりも統一性を見出しやすい。イスラエルの年に三度の祭りに、エルサレムに歌いながら上って行った巡礼歌であるとも言われている。

この詩集を例に、詩篇の配列編集に重大な意義があることを明らかにしたい。

1. 鍵語と鍵句：

頻出語と共通句を探ることにより、詩篇相互の関係を観察し分析する。

2. 三段落の構造：

この詩集は、120篇から124篇、125篇から129篇、130篇から134篇の三段落で構成される。

3. 詩篇132篇：

この詩集は、ダビデの契約の成就である132篇で最高潮に達する。

4. シャローム：

個々の詩篇だけではなく、配列構造全体が、シャロームの祝福を歌っている。

5. 第五巻の中での位置づけ：

第五巻の中でのこの詩集の役割、および、詩篇全体の中での第五巻の位置づけを探る。

第五巻の第二集である119篇は、七週の祭り・五旬節の段落。シナイ山で「守る」ことを教える。次の第三集、都上りの詩篇集は、シオンの山、神の都で「守られる」ことを賛美する。